

追悼 五百旗頭真 神戸大学名誉教授 いま、この世界を生きる「人々に 尽くした歴史学者」



東日本大震災復興構想会議発足間もない2011年4月26日、日本外国特派員協会会で復興構想を世界に向け発信する (Natsuki Sakai / アフロ)

いおきべ まこと
(1943年12月16日～2024年3月6日)
兵庫県西宮市生まれ。1967年京都大学卒、69年同大学大学院法学研究科修士課程修了。日本政治外交史を専攻、猪木正道、高坂正堯に師事。法学博士(京都大学)。広島大学助教授を経て81年に神戸大学教授、同大学法学研究科・国際協力研究科教授、防衛大学校長、熊本県立大学理事長、兵庫県立大学理事長などを歴任。阪神大震災の経験から東日本大震災や熊本地震の復興構想をまとめた。ひょうご震災記念21世紀研究機構構理事長。

井上正也

慶應義塾大学教授
いのうえ まさや 一九七九年生まれ。
二〇〇二年神戸大学卒、同大学大学院
法学研究科博士後期課程修了。博士政
治学。香川大学、成蹊大学を経て三
年から現職。著書に「日中国交正常化
の政治史」、五百旗頭真との共著に「も
う一つの日米交流史―評伝福田赳夫
戦後日本の繁栄と安定を求めて」など。

五百旗頭真先生は亡くなるその日まで現役であった。八〇歳を迎えても、いくつもの公職をかけ持ち、健筆を振るい、活発な議論を交わしていた。国内外を飛び回る先生からは、老いの気配すら感じられず、今年の年賀状には野球のユニフォームを身にまとう颯爽とした写真が印刷されていた。それだけに葬儀が終わってもまだ実感がわかない。

今でも鞆を片手に「やあ」と言っ、いつもの笑顔で歩いてきそうな気がする。

神戸大学法学部の学部ゼミ時代から四半世紀近く関わった指導を受けた。防衛大学校長や震災復興で大きな足跡を残された先生であるが、私が間近で見てきたのは、何といっても日本政治外交史の研究者であり、多くの門下生

を育てあげた教育者としての姿である。ここでは歴史家としての先生の業績を振り返ることで追悼に代えたい。

原史料をもとに「戦後日本の起点」を活写

五百旗頭先生の歴史研究の魅力は、緻密な史料分析に基づくミクロな視点と、歴史のダイナミズムを描くマクロな視点を結び合わせた点にある。それは中学から高校にかけてシェークスピアの悲喜劇に夢中になり、大学に入ってからハーゲルの『精神現象学』を読む勉強会に参加し、一時は「ハーゲルと初期マルクス」を研究テーマにすることも考えたという知的遍歴に起因するものだろう。修士論文のテーマであった「石原莞爾と満洲事変」は、東洋文明と西洋文明の対決という独自の歴史観（「世界最終戦論」）を持つ石原の行動原理を内在的に理解しようとして試みたものであった。けれども、当時の日本の史料公開の閉鎖性もあって、研究は未完のまま終わった。

大きな転機となったのは一九七四年の渡米である。アメリカでは、三〇年経てば原則として原史料を公開する「三〇年ルール」が導入されていた。先生が渡米したのは、幸運にも第二次世界大戦中の機密文書が次々と公開され始めた時期であった。それは先生の言葉でいう「歴史研究者とし

ての青春時代」の始まりとなった。その後、ハーバード大学での在外研究を経て、徹底した史料調査と関係者インタビューに基づいて書きあげられたのが、サントリー学芸賞を受賞した代表作『米国の日本占領政策』上・下（中央公論社、一九八五年）である。「日本史家による『外への旅』の試みである」という書き出しで始まる同書は、アメリカの対日占領政策の形成過程を、大統領を中心とする上からの方針と、国務省知日派による下からの計画という二つのテーゼの展開と統合という観点から描き出したものだ。また、同書は国際政治学の理論を取り入れた事例研究でもあった。すなわち、無味乾燥になりがちな行政機関内の政策形成過程を説明するため、アリソンの官僚政治モデルを歴史叙述に埋め込むことによって、日本占領政策の概念的な整理を試みたのである。

国際的文脈から戦後日本の起点を明らかにしたこの著作は、その後に展開される占領・戦後史研究の出発点となった。この後、米国の占領政策が戦後日本の政治外交にどのような影響をもたらしたかを俯瞰した『日米戦争と戦後日本』（大阪書籍、一九八九年）、占領期における五人の宰相の政治指導に焦点をあてた『占領期』（読売新聞社、一九九七年）を次々と発表し、いずれも吉田茂賞や吉野作

造賞を受賞するなど高い評価を受けたのである。

優れた歴史書は総じて現代的意義を持つものだが、とりわけ、『占領期』は執筆された一九九〇年代後半の時代性と切り離して考えられない。バブル崩壊後の経済低迷と五五年体制の崩壊によって、日本は混迷の中にあつた。占領期の政治家たちのリーダーシップを描いた同書は、明らかに政治・行財政改革に苦闘する同時代の政治家を意識していた。歴史を動かす主体について考察し、指導者のリーダーシップに可能性を見出す先生の筆は実に冴え渡っている。「歴史は状況と個人とが織りなす錦絵である。状況を支配したこの手ごたえを実感できた史上の英雄すらも、実は状況のひとコマでしかないというのが実相であろう。他方、状況をつくり支えるのが、所詮は人でしかないのもまた真実である。わずかの改革も容易でない事態を眼前に見るにつけ、最も困難な状況と格闘する人間の可能性を、本書によって尋ねてみたいと思つた」(『占領期』講談社学術文庫版、五頁)。

いかなる人物も最初から特定の鑄型へと流し込まない。状況に拘束されながらも、あくまでそれを変えようと闘う姿を躍動的に描き出す。それこそが五百旗頭歴史学の真骨頂であつた。

いまの問題に関わることは「未来への責務」

先生の業績としても、一つ強調すべきは、日米関係を中心とする戦後日本外交史研究の最前線を切り拓いた点であろう。一九九〇年代当時、戦後日本外交についてはいまだ十分な公文書が解禁されておらず、アメリカやイギリスの外交文書をあたるほかなかつた。そのため、歴史研究者の間では、戦後はまだ歴史ではないとして、研究対象とすることに慎重な声もあつた。しかし、こうした意見に先生は強く反駁された。確かに時間が経てば、完全なものが書けるかもしれない。けれども、現在の問題に何も言わない禁欲的な姿勢は立派なのであろうか。今この世界に生きる学生たちに対して、未来への多少のサーチライトになるのは、学問をやる人に課せられた社会的な責務ではないか。現代の課題に直結する戦後外交の研究は進めねばならない。こうした考えのもと、先生は六〇年代、七〇年代といった近過去を研究対象とし、私を含めた指導する大学院生にも戦後外交を研究することを奨励した。先生が編者となつた『戦後日本外交史』(有斐閣、一九九九年〔初版〕)は、初めて戦後日本外交を対象にした教科書であり、ロングセラーとなつて現在に至るまで版を重ねている。



1999年、小渕恵三内閣「21世紀日本の構想」懇談会の「世界に生きる日本」分科会座長を務める。小渕・小泉・福田と歴代内閣のアドバイザーとして、外交の指南役をも担った(時事)

歴史家として、今を生きる人たちの未来を照らす使命感を持った先生は、現状分析にも果敢に切り込んでいった。冷戦終結という世界秩序の大変動もそれを後押しした。スケールの大きな文明論をふまえた時論は、その豊かな表現もあいまって多くのファンを生み出した。論壇の新風を歓迎したのは市井の人々だけではない。佐藤栄作内閣の首相秘書官を務め、知識人と政治を結びつけてきた楠田實氏は、主宰するさまざまな研究会に先生を招き入れた。また、国際民間交流の先駆的存在であった山本正氏も、数々の知的交流の場に先生を引き入れた。こうした活動の場が広がり

見せるなかで、小渕恵三氏や福田康夫氏といった宰相との知己を得るようになり、先生は政権のブレーンに名を連ねていくことになる。

特筆すべきは、先生は歴史の知見を、現実政治を担う人々に授けるだけではなく、その交流を契機にして、多くの一次史料や証言を世に送り出したことであろう。例えば、先生が編者となった『楠田實日記』（中央公論新社、二〇〇一年）は、佐藤政権期の内外政策を理解するための第一級史料である。また『論座』に連載された「九〇年代の証言」や『橋本龍太郎外交回想録』（岩波書店、二〇一三年）のような政治家や外交官に対する同時代オーラル・ヒストリーも精力的に手がけている。これらの証言記録は、今後九〇年代の歴史研究が本格化するなかで欠かせない基礎資料になろう。

どんなに多忙でも、歴史研究を語られる時の先生はいつも楽しそうであった。新しい史料の発見や面白い研究が登場すると「井上君、教えてほしいことがあるのだけ」と、興味津々に電話で尋ねてこられた。最近も先生に誘われて、ある研究プロジェクトを立ち上げる準備を進めていたところだった。師の大きな背中を追いかけてながら、これからも研究の歩みを続けていきたい。●